

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03095

研究課題名（和文）近世大名家臣家史料の共同分析 - 多久家史料の読み直しを中心として -

研究課題名（英文）Joint analysis of historical materials of early modern Daimyo's retainers-Focusing on the Taku family historical materials-

研究代表者

小宮 木代良（Komiya, Kiyora）

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：90186809

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、近世佐賀藩の重臣であった多久家に伝来した近世前期の文書約750通を対象として、11名の研究者の共同作業により、人物比定、関係人物の居所確定等を行いつつ、年次検討の作業を行った。その結果、これまで年次未定であったもののうち、約320点について、年次の確定・推定をおこなうことができた。それ以外の年次未詳史料についても、複数の年次候補に絞り込むことができた。その結果と分析過程を史料一点毎に付した報告書を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、近世前期の大名家の特長を明らかにするうえで重要な、大身大名家臣家伝来の大量の文書について、登場人物の居所、年次等を、共同作業の中で検討することができた。その結果については、検証過程とともに、文書一点ごとのメタデータとして付した。このことにより、将来の検証可能性をも担保できた。これは、近世から続く「読み合わせ」による考証という史料への向き合い方と共通するが、今後、ネット上での情報共有、史料画像のリンク等とつなげることで、さらなる学術上の継続性と広がりを期待することができ、また、過去の事実に関わる情報資源を公有のものとしてどのように継承していくべきかの方向性をも示すことができた。

研究成果の概要（英文）：In this research, about 750 documents from the early modern period that were handed down to the Taku family, who were senior vassals of the early modern Saga domain, were investigated. As a result, we were able to confirm and estimate the year of about 320 items that had not been decided until now. We were also able to narrow down multiple year candidates for other yearly unidentified historical materials. A report was prepared with the results and analysis process attached to each historical material.

研究分野：日本史

キーワード：大名家臣 佐賀藩 近世前期 多久家 公儀軍役 女性の手紙

1. 研究開始当初の背景

1960年代の『佐賀県史料集成』による多久家文書折帖分等の刊行は、佐賀藩成立期の重要な政治史料としての多久家文書の研究利用を格段に進めた。それ以前の研究においては、「勝茂公譜考補」等の編纂家史料が中心であった。『佐賀県史料集成』に先行してなされた城島正祥氏の研究は、「肥陽旧章録」収載の文書類を核にしたものであり、その段階でも革新的なものであったといえる。『佐賀県史料集成』による刊行によって、一挙に格段に広い範囲の人々にとって、一次史料である文書一点一点からの研究が可能となった。しばらくは、城島氏が「肥陽旧章録」から引用していた文書を、『佐賀県史料集成』の整理番号に置き換えて確認するということが研究の出発点となることもあった。『佐賀県史料集成』における多久家文書刊行の意義は言い尽くせないものがある。しかし、『佐賀県史料集成』は、編纂者三好不二雄氏の個人的な献身に負う部分が多く、時間的制約からも、年次比定や人物比定等についての情報が不足している。多久家に残されていた近世初期の文書史料を、後世の人々が、整理し、分析していくという営為は、世代をこえて息長く続いてきた。『佐賀県史料集成』の刊行は、その過程の中の大きな一歩であるが、さらなる一歩は、次の世代によって踏み出される必要がある。世代を越えた営為を単純な繰り返しとしないためには、先人の作業の成果を足場としつつ、さらに将来につなげていく工夫が必要となる。『佐賀県史料集成』に限らず、近世に成立した「肥陽旧章録」等に不足していたのは、文書一点毎のメタデータ共有環境の整備である。具体的には、そのほとんどを占める無年号文書の年次比定、差出・宛名をはじめとする登場人物の人名比定と、それぞれの居所の推定、これらの要素は、検討の過程において、互いに複合的に関連しあい、またそれぞれの文書間でも重層的な関連が生ずる。研究プロジェクトでは、それらを改めて検討し、あらたな成果をメタデータとして文書に付すための共同作業が必要であると考え、これを「読みなおし」と位置づけた。

2. 研究の目的

本研究は、日本近世大名家内部の大身家臣家に伝来した史料群について、その一点ごとの史料の年次比定、人物比定、内容分析を、複数の研究者による共同作業を行うことにより、現段階でもっとも確実に客観的な分析成果を確定し、それを公開することを目的とするものである。具体的には、本研究期間においては、佐賀鍋島藩における大身家臣の多久家史料(多久市郷土資料館蔵)の近世前期分を分析対象とし、当該時期の全体的な政治史料分析に経験を有する代表者及び分担者と、当該地域の史料分析に豊富な経験を有する佐賀地域の研究者との間での共同分析を行った。さらに、分析を進めて行く中で、当該期の他の大身家臣家史料分析の可能性と必要性についても、一定の見通しをつけた。

日本近世前期の政治史研究は、基本的には、幕府と藩との間の関係、藩と藩相互の関係、さらには幕府および藩内部における諸事象に関連する一次史料を用いた緻密な分析の蓄積によって深化されてきている。戦前に『大日本古文書』等において活字化が開始されていたものもあるが、大名家文書の整理と公開の進展は、戦後の社会変化の中で本格化し、現在に続く。それにより、大量の当該期の一次史料は、研究者にとってアクセスが容易になり、そうした研究環境を前提として、幕藩関係史、藩政史等における研究の深化・緻密化が見られた。萩藩毛利家・熊本(小倉)藩細川家・鹿児島藩島津家・仙台藩伊達家・高知藩山内家・徳島藩蜂須賀家・米沢藩上杉家・秋田藩佐竹家・佐賀藩鍋島家・柳川藩立花家・厳原藩宗家・弘前藩津軽家、等々(これ以外にも多数あるが略する)では、近世前期の大名家当主の関連文書等が、関係者の絶え間ない努力によって、この数十年の間に、研究素材としてより広く共有化されてきた。なお、幕府側に伝来した史料については、近世前期のものは、極端に少ないため、藩の側において伝来した史料の重要性が強く認識されている(小宮木代良『江戸幕府の日記と儀礼史料』、吉川弘文館、2004)。ここで、近世前期政治史資料としての大名家文書の中心となっているのは、大名本人の発給文書および受給文書である。それらの文書の分析により、細川家、島津家、蜂須賀家、毛利家等をはじめとして、幕藩関係や藩内部の政治過程についての分析が進められている。だが、大名本人の発給文書は、案文や写等の形で残っているものを除けば、実は、大名家自体においてよりも、それを受給した側に伝来しているものが圧倒的に多い。大名どうしの文書のやりとりにより、他家の大名の書状等が大名家史料中に伝来している場合もそれに含まれる。しかし、その場合よりも、当時の藩内部の政治的意思伝達の原則を考えれば、藩主と家臣、とくに、藩主が国許にいる時は、江戸にいる家臣、藩主が国許にいる場合は、江戸の家臣等との間にやり取りされた文書が、それを受け取った家臣の側に蓄積されていることの方が圧倒的に多い。ここで、視点を家臣の側に置けば、藩主との間だけではなく、家臣同士、また他家の家臣との間でも膨大な量の政治的な情報交換が繰り返されている。すなわち、大名家文書の分析を前提としつつも、家臣側に残された史料の分析が、不可欠のものであることは明確である。そこで、大名家臣、とくに多くの文書を伝来している可能性の高い大身の家臣家伝来文書についての、現段階での整理・分析状況はどうなっているだろうか。たとえば、熊本藩家老松井家文書の場合は、熊本県内の研究者グループ(細川家史料の整理や分析に長く携わってきた関係者を中心として)の絶え間ない努力を前提として、20数年間の期間をかけて、近世前期のものを中心とした3000通以上分の解読、分析、

活字による刊行が急速に進められている（『松井文庫所蔵古文書調査報告書』1～21、八代市立博物館未来の森ミュージアム編集発行、1996年～2021年）。だが、それでも、刊行分は、おそらく当該期分の松井家史料全体の半分程であり、既刊分についても、年次比定が困難なものが多数残されている。これに対応する大名細川家伝来史料を収めた『大日本近世史料 細川家史料』は、50年以上をかけて約8000通以上が刊行されているが、松井家史料の分析の進展と相俟って、研究史料としての新たな価値を持つにいたっている。この事例から明らかなのは、大身家臣家史料の整理・分析は、多大の労力を必要としているということ、しかし、それが成就した時には、先行する大名家史料の分析成果と相俟って、計り知れない研究の飛躍をもたらすに違いないということである。松井家文書のような事例は、全国的には、まだそれほど多くない。前提として、熊本の場合のように、従来からの大名家史料の分析にも深い経験を有し、また、複数の参加者による読み合わせ的な作業を長期にわたり行うことには、想像以上の困難さがあり、作業が長期にわたることを考えれば、参加者の世代交替もはかられていく必要がある。もちろん、全国各地の地域研究者の熱意によって、家臣家文書の整理・刊行が行われた事例は、これまでも存在する。だが、分析に必要なデータを手に入れるための研究環境が整っていない時期のものであったり、個人的な作業であったりして、とりわけ年次比定・人物比定を中心とする諸分析が不十分なために、せっかくの成果がすぐには他の研究分析に利用できないままとなっている場合が少なくない（高橋修「石母田家文書の整理について」『東北歴史資料館研究紀要』22、1996）。本研究では、このような全体的な研究状況を踏まえ、各大名家の家臣文書分析を前進させていくための一階梯として、佐賀藩重臣多久家史料の近世前期分およそ800通について、佐賀地域の研究者と共同して確実な分析を行うことを主な課題とする。

多久家史料については、1964年から1969年にかけて『佐賀県史料集成古文書編』第8巻～10巻において、近世前期分のうち約800点が翻刻・刊行されている。これにより、研究者に知られるところとなった多久家史料は、その後の近世前期の幕藩政治史研究において、広く利用されるようになった。しかし、当時の研究環境（関連する参照データの入手、他の大名家史料の公開等）の現在との違い、また一人の研究者を中心として行われ、グループによる検討ではなかったこと等により、現在の視点から検討すると、年次比定等を中心として、再検討・再分析が必要である。『佐賀県史料集成』本の刊行から現在までの間に、以後の『佐賀県史料集成』や『佐賀県近世史料』・佐賀県立図書館データベース等において、関連する文書群やデータ参照のための参考資料が整備され、また、細川家史料・松井家史料・柳川立花家史料等々の近接する大名家史料の利用環境も向上した。多久家史料を研究対象とするのは、研究環境の上からも最良のタイミングであると判断した。

3. 研究の方法

本科学研究課題開始に先行して、2014年度より2017年度まで、本研究の研究代表者及び研究分担者及び研究協力者の大部分は、所属する東京大学史料編纂所における共同利用・共同研究拠点の共同研究（以下、拠点共同研究）課題の一つとして、多久家史料の研究を行ってきた。佐賀地域の研究者グループとともに、2016年度までに多久家史料のうち300点余の共同分析作業を終え、その過程で明らかになった成果の一部を、多久で開催したシンポジウムで報告していた。

拠点共同研究の開始に先立って、多久市郷土資料館において同館所蔵の卷子本等を高精細画像のデジタルカメラで撮影し、そのデータを研究会参加者で共有していた。本科研は、このプロジェクトの完成を目指したものである。前身の拠点共同研究による経過を含む多久家文書研究プロジェクトのメンバーおよび日程、具体的な研究進行の手順と、これまでの成果は、以下の通りである。

メンバー

・2014年度の開始時におけるメンバーは、以下の十名である。

- 小宮木代良（東京大学史料編纂所）
- 佐藤孝之（東京大学史料編纂所）
- 及川亘（東京大学史料編纂所）
- 大園隆二郎（多久古文書村村長、2015年度までの参加）
- 西村隆司（多久市立郷土資料館、この年度のみの参加）
- 本多美穂（佐賀県立図書館）
- 松田和子（佐賀県立図書館）
- 清水雅代（佐賀県立図書館）
- 藤井祐介（佐賀県立博物館）
- 野口朋隆（昭和女子大学、2015年度までの参加）

・二年目（2015年度）に、左記のメンバーの新規の参加があった。

- 志佐喜栄（多久市郷土資料館、前年度の西村隆司氏と交替）
- 大平直子（佐賀市文化財課）
- ・三年目（2016年度）には、左記のメンバーの新規の参加があった。
- 田久保佳寛（小城市教育委員会文化課）
- 佐藤紘一（鳥取県立図書館、この年度のみの参加）
- ・四年目（2017年度）には、左記のメンバーの新規の参加があった。

○石津裕之（於東京大学史料編纂所）

研究会の開催

第1回 2014年9月5日～同7日（於東京大学史料編纂所）

第2回 同年12月12日～同14日（於多久市郷土資料館）

第3回 2015年7月24日～同26日（於東京大学史料編纂所）

第4回 同年11月13日～同15日（於多久市郷土資料館、11月15日午後はシンポジウム開催）

第5回 2016年6月24日～同26日（於東京大学史料編纂所）

第6回 同年12月9日～同11日（於多久市郷土資料館）

第7回 2017年7月11日～同3日（於東京大学史料編纂所）

第8回 同年11月25日～同27日（於多久市郷土資料館、十一月二十六日午後はシンポジウム開催）

第9回 2018年6月30日～7月2日（於東京大学史料編纂所）

第10回 同年10月5日から同7日（於多久市郷土資料館）

第11回 2019年6月14日～同16日（於東京大学史料編纂所）

第12回 同年11月8日～同10日（於多久市郷土資料館）

第13回 2020年9月26日（オンライン Zoom による開催）

第14回 同年11月21日（オンライン Zoom による開催）

第15回 同年12月5日（オンライン Zoom による開催）

第16回 同年12月18日（オンライン Zoom による開催）

第17回 2021年1月22日（オンライン Zoom による開催）

第18回 同年3月19日（オンライン Zoom による開催）

以上の18回で、卷子本分701点の検討の一度目を終えたが、報告書作成を念頭に、以下、再度確認のための研究会を継続することとした。

第19回 2021年6月12日（オンライン Zoom による開催）

第20回 同年7月31日（オンライン Zoom による開催）

第21回 同年9月18日（オンライン Zoom による開催）

第22回 同年10月16日（オンライン Zoom による開催）

第23回 同年11月27日（オンライン Zoom による開催）

第24回 2022年1月8日（オンライン Zoom による開催）

第25回 同年2月12日（オンライン Zoom による開催）

第26回 同年4月9日（オンライン Zoom による開催）

第27回 同年5月15日（オンライン Zoom による開催）

第28回 同年6月11日（オンライン Zoom による開催）

第29回 同年7月9日（オンライン Zoom による開催）

第30回 同年8月3日（オンライン Zoom による開催）

第31回 同年8月20日～21日（於東京大学史料編纂所）

右のうち、第13回から30回までのオンライン Zoom による研究会開催は、コロナ感染拡大への対応である。

読み直しの具体的な手順

まず、メンバーの分担分を定め、高精細史料画像をもとにした史料翻字分の確認、人名比定、人物の居所比定、年次比定等を行った。その成果は、データ化し、共有フォルダにあげておき、共同での読み合わせを

行う前の一定期間中に、共有フォルダ（teamfile を使用）にあげられた分を、全員で校閲、要修正点等を書き込んでおくこととした。Word を用いて行う段階では、その校閲機能を用いて、相互の質問のやりとりも書き込んでおいた。読み合わせの場では、原本史料等も見ながら校閲内容の最終確認を行った。以上の手順は、最初から確立していたわけではなく、PDF も含めて様々な道具立て等を試す中から最終的に決まっていた。

4. 研究成果

報告書『多久家文書の「読みなおし」』（多久家文書研究会編、東京大学史料編纂所研究成果報告2022-1）は、佐賀県重要文化財の多久家資料のうち、卷子100本分に収められている746通の文書（『佐賀県重要文化財多久家資料及び後藤家文書目録』多久市郷土資料館、2003年のうち、多久家文書一〇書状の部分）を対象としている。以下、これを卷子本と呼ぶ。1958年に、多久龍三郎氏より多久市立図書館に寄贈された多久家資料の一部である。この卷子本は、当初は九冊の折帖に収められていたが、のちに元の折帖九冊をさらに細かく分けた現在の卷子100本に仕立て直されている。まだ折帖9冊の状態であった1964年から1969年にかけて、佐賀県立図書館編の『佐賀県史料集成』第8巻・第9巻・第10巻に翻刻刊行されているが、この時の刊行文書数は701通であり、45点は刊行分から外されていた。今回、この分についても、翻刻の上、今回の報告書に加えることとした。多久家は、佐賀鍋島藩の重臣の家である。今回報告分の対象とした卷子本収載文書746通のうち、6割を超える462通が、佐賀藩初代藩主鍋島勝茂（1580年生～1657年歿）発給のものであり、多くは、同時期の多久家当主の多久安順（1563年生～1641

年歿)、およびその後を継いだ多久茂辰(1608年生~1669年歿)にあてたものであるのは、多久家が、この時期、佐賀藩政の中枢にいたことを反映している。次に多いのは、多久茂辰発給文書(55通)、茂辰室天性院(1608年生~1667年歿)発給文書(34通)、および茂辰と天性院の子女たちの発給文書(100通余)である。茂辰発給分以下のほとんどは家族宛のものであり、そこでは、おもに17世紀中頃を中心とした多久家の家族関係をうかがえるやりとりが交わされている。さらに、近世の多久家との関係は不明であるが、中世の在地(佐賀郡)の武士である於保家に關わる史料群等、多久家との関係が不明のものもこの中に含まれている。

以上の報告書とは別に、2017年度開催のシンポジウム(「多久家文書を読みなおす2 テーマ 近世前期における公儀軍役負担と佐賀藩」2017年11月26日、於多久市東原庁舎、80名参加)における4報告を論文としてまとめ、『近世前期の公儀軍役負担と大名家』(小宮木代良編、岩田書院、2019年3月)を刊行した。同書には、2015年度開催の多久家文書共同研究成果報告シンポジウム(『多久家文書を読みなおす』2015年11月15日、於多久市東原庁舎、90名参加)からも4報告を論文として掲載した。また、多久家文書と深く関連する坊所鍋島家についても、基盤研究(B)「近世統一政権の成立と天下普請の展開 中近世移行期史料の研究資源化を通じて」(研究代表者及川亘 2017年度~2020年度)と協力しつつ、その未刊行分の一部について、『坊所鍋島家文書未刊分 鍋島道虎関係』(石津裕之・及川亘・小宮木代良・佐藤孝之編、東京大学史料編纂所研究成果報告2020-5、2021年)に翻刻・年次比定・研究成果等をまとめた。坊所鍋島家文書については、あらたに2022年より多久家文書研究会のメンバーを中心に、坊所鍋島家文書研究会を立ち上げ、2023年度より、あらたに拠点共同研究および科学研究費による研究を開始する。

今回の「読みなおし」分から分かったこと 今回の「読みなおし」において「分かった」ことの第一は、「読み合わせ」という作業の重要性である。これは、近世における営為ともつながる。複数のメンバーによる「読み合わせ」により、史料群の中のひとつひとつの文書が、互いに重層的かつ複合的な意味を持っていく過程を経験した。一人で史料に向かい続けても、「読み合わせ」におけるほどの発見はなかなか得られない。このことは、私たちに共同研究というものの意味をあらためて気づかせてくれる。また、かつて多久家や佐賀藩による多久家文書へのコンタクトが繰り返されていたことは、こうした「読み合わせ」が何度となく繰り返されてきたであろうことを想像させる。過去における「読み合わせ」の成果を、次の「読みなおし」のために引き継いでいくことが必要である。ただし、それは、結論のみの継承ではなく、考証過程の継承をとまわなくてはならない。近世以来の史料考証における「按文」の技法は、そのような認識から生まれた。現在において、デジタルデータを介在させた「読み合わせ」を行う場合も、考証過程も含めた情報をメタデータとして付加し、次の「読みなおし」にそなえる必要がある。なお、多久家文書の「読みなおし」から分かったことの二つ目は、近世成立期における大名発給文書が大量に含まれる大名家臣家史料の発掘、あるいは「読みなおし」の必要性である。今回のメンバーとともに、佐賀藩家臣坊所鍋島家文書を次の「読みなおし」の対象とする準備を、進めているところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 本多美穂	4. 巻 2022-1
2. 論文標題 鍋島光茂の「初御目見」の時期をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『多久家文書の「読みなおし」』（東京大学史料編纂所研究成果報告2022-1）	6. 最初と最後の頁 518-524
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川亘	4. 巻 2022-1
2. 論文標題 鍋島勝茂の居所と行動について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『多久家文書の「読みなおし」』（東京大学史料編纂所研究成果報告2022-1）	6. 最初と最後の頁 525-566
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮木代良	4. 巻 2022-1
2. 論文標題 解題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『多久家文書の「読みなおし」』（東京大学史料編纂所研究成果報告2022-1）	6. 最初と最後の頁 505-517
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川亘	4. 巻 41号
2. 論文標題 公儀御普請 - 現場監督する大名 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 城郭史研究	6. 最初と最後の頁 3-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮木代良	4. 巻 2021-18
2. 論文標題 元和度の江戸城本丸天主台普請と広島浅野家	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『近世統一政権の成立と天下普請の展開』（東京大学史料編纂所研究成果報告 二〇二一 - 一八）	6. 最初と最後の頁 121-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川亘	4. 巻 2021-18
2. 論文標題 「坊所鍋島家文書」に見る公儀普請	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『近世統一政権の成立と天下普請の展開』（東京大学史料編纂所研究成果報告2021 - 18）	6. 最初と最後の頁 51-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川亘	4. 巻 3
2. 論文標題 「名古屋御城石垣絵図」を読む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『史料が語る 名古屋城石垣普請の現場』（名古屋城調査研究センター編 名古屋城調査研究報告3 史料調査研究報告書1）	6. 最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川亘	4. 巻 2020-5
2. 論文標題 「坊所鍋島家文書」に見る鍋島勝茂等の慶長・元和期の居所と行動について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『坊所鍋島家文書未刊分－鍋島道虎関係－』（東京大学史料編纂所研究成果報告 二〇二〇 - 五）	6. 最初と最後の頁 132-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮木代良	4. 巻 2020-5
2. 論文標題 解題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『坊所鍋島家文書未刊分一鍋島道虎関係一』（東京大学史料編纂所研究成果報告 二〇二〇 - 五）	6. 最初と最後の頁 127-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮木代良	4. 巻 勉誠出版
2. 論文標題 江戸幕府右筆所日記について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世・近現代文書の保存管理の歴史	6. 最初と最後の頁 14-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川亘	4. 巻 87
2. 論文標題 靖國神社遊就館所蔵「名古屋御城石垣絵図」について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 画像史料解析センター通信	6. 最初と最後の頁 10-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石津裕之	4. 巻 278
2. 論文標題 近世における神社と門跡の関係：祇園社と青蓮院・妙法院を事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ヒストリア	6. 最初と最後の頁 49-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮木代良	4. 巻 H-27
2. 論文標題 明清交替情報と佐賀藩の長崎番役	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世後期の公儀軍役負担と大名家 - 佐賀藩多久家文書を読みなおす -	6. 最初と最後の頁 77-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小宮木代良	4. 巻 H-27
2. 論文標題 肥前杵島郡白石地域と鍋島勝茂	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世後期の公儀軍役負担と大名家 - 佐賀藩多久家文書を読みなおす -	6. 最初と最後の頁 128-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川亘	4. 巻 H-27
2. 論文標題 現場監督する大名 - 多久家文書にみる公儀普請 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世後期の公儀軍役負担と大名家 - 佐賀藩多久家文書を読みなおす -	6. 最初と最後の頁 11-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 及川亘	4. 巻 H-27
2. 論文標題 鍋島勝茂自筆文書の特徴 - 形態・封式を中心に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世後期の公儀軍役負担と大名家 - 佐賀藩多久家文書を読みなおす -	6. 最初と最後の頁 108-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大平直子	4. 巻 H-27
2. 論文標題 多久家文書にみる大坂冬の陣後の城割普請	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世後期の公儀軍役負担と大名家 - 佐賀藩多久家文書を読みなおす -	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水雅代	4. 巻 H-27
2. 論文標題 佐賀藩の長崎警備 - 正保二年の鍋島勝茂書状を中心に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世後期の公儀軍役負担と大名家 - 佐賀藩多久家文書を読みなおす -	6. 最初と最後の頁 53-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田和子	4. 巻 H-27
2. 論文標題 めでたき春 - 寛永十六年正月勝茂親子の將軍御目見え -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世後期の公儀軍役負担と大名家 - 佐賀藩多久家文書を読みなおす -	6. 最初と最後の頁 98-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤孝之	4. 巻 H-27
2. 論文標題 「御上洛」情報の真偽	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近世後期の公儀軍役負担と大名家 - 佐賀藩多久家文書を読みなおす -	6. 最初と最後の頁 118-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤孝之、杉森玲子、荒木裕行、林晃弘	4. 巻 第28号
2. 論文標題 嘉永七年「恒例関東献上使日記」と安政東海地震	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京大学史料編纂所研究紀要	6. 最初と最後の頁 186-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石津裕之
2. 発表標題 近世中後期における宮門跡の序列と天皇・院の養子・猶子
3. 学会等名 朝暮研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小宮木代良
2. 発表標題 松平忠直事件に関わる史料の成立と伝来
3. 学会等名 福井県文書館講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小宮木代良
2. 発表標題 明清交替情報と佐賀藩の長崎番役
3. 学会等名 多久家文書を読みなおす2（東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点特定共同研究「近世初期大名における大身家臣史料群の研究資源化」プロジェクトグループ成果報告シンポジウム）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 及川 亘
2. 発表標題 現場監督する大名 - 多久家文書にみる公儀普請 -
3. 学会等名 多久家文書を読みなおす2 (東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点特定共同研究「近世初期大名家における大身家臣史料群の研究資源化」プロジェクトグループ成果報告シンポジウム)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 及川 亘
2. 発表標題 佐竹義宣と鷹狩
3. 学会等名 あきたスマートカレッジ (招待講演)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 多久家文書研究会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 多久家文書研究会	5. 総ページ数 691
3. 書名 『多久家文書の「読みなおし」』 (東京大学史料編纂所研究成果報告 2022 - 1)	

1. 著者名 石津裕之共著 福田千鶴、藤實久美子編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 488
3. 書名 近世日記の世界	

1. 著者名 石津裕之共著 横田冬彦編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 公益財団法人 郡山城史跡・柳沢文庫保存会	5. 総ページ数 343
3. 書名 柳沢版家老「藪田家文書」の目録と解題	

1. 著者名 石津裕之・及川亘・小宮木代良・佐藤孝之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学史料編纂所	5. 総ページ数 204
3. 書名 『坊所鍋島家文書未刊分 - 鍋島道虎関係 - 』（東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二〇 - 五）	

1. 著者名 小宮木代良編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩田書院	5. 総ページ数 141
3. 書名 近世前期の公儀軍役負担と大名家	

1. 著者名 高橋 慎一郎、千葉 敏之、黒嶋敏、及川亘、加藤玄、岩本馨、金沢百枝、横手義洋(共著)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 256
3. 書名 移動者の中世	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 孝之 (Sato Takayuki) (30170757)	東京大学・史料編纂所・教授 (12601)	
研究分担者	及川 亘 (Oikawa Wataru) (70282530)	東京大学・史料編纂所・准教授 (12601)	
研究分担者	石津 裕之 (Ishizu Hiroyuki) (50812674)	東京大学・史料編纂所・助教 (12601)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	本多 美穂 (Honda Miho)		
研究協力者	松田 和子 (Matsuda Kazuko)		
研究協力者	清水 雅代 (Shimizu Masayo)		
研究協力者	藤井 祐介 (Fujii Yuusuke)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	志佐 喜栄 (Shisa Kie)		
研究協力者	大平 直子 (Oohira Naoko)		
研究協力者	田久保 佳寛 (Takubo Yoshihiro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関